# パーリ聖典中の pasāda の意味について

古　川　洋　平

## はじめに

初期仏教研究において仏弟子が仏等に対して懐く「信」を考察する際には，パーリ聖典中のサンスクリット語 śrad-√dhā に由来する語（Ś）[1] とともに，同じく pra-√sad に由来する語（P）の考察が必須となる．もっとも，その重要性にも拘らず，P についてはこれまで Ś の考察に付随する形で取り上げられる傾向が強い．その原因は，P のもつ多義性に加え[2]，P を Ś とは別個の語と見る態度の不徹底にあると考えられる[3]．本論ではこの点に注意を払いながら，聖典中に用いられる内面的な P の在り方の整理を試みる．

## 1.　水や心の汚れが「落ち着き」「清らかになる」

yathodake āvile **appasanne** na passati … evaṃ āvilamhi citte …
yathodake acche **vippasanne** so passati, … evaṃ anāvilamhi citte …（Ja II, pp. 100–101［186.67–68］）
水が汚れ，〔**汚れが**〕**落ち着き清らかではない**場合，人が〔水中に〕……見ないように，そのように心が汚れている場合，……
……水が清らかで〔**汚れが**〕**落ち着き清らかになりきっている**場合，人が〔水中に〕……見るように，そのように心が汚れていない場合，……

本例は水や心の中の汚れにあたるものが「落ち着くこと」，その結果「清らかになること」という P の意味をよく表している[4]．後者に関しては，仏について「心が清らかになること」の意味で pasāda を用いる例が確認される（S V, p. 390）．以下，上に指摘した P の2つの側面を基点として，心的な P の意味の在り方を整理していく．

## 2.　心が「落ち着く」

bhus' amhi kuddho ti avekkhiyāna

na tāva daṇḍaṃ panayeyya issaro, …
yato ca jāneyya **pasādam** attano …
ath' assa daṇḍaṃ sadisaṃ nivesaye.（Ja III, p. 441［420.27–28］）
「私は激しく怒っている」と見て取った場合，
その〔怒っている〕間，主宰者（王）は刑罰を下すべきではない．……
そしてその後，自分の **pasāda**（**〔怒り等の〕落ち着き**）を知ったならば，
……そこでその者（罪人）にそういった刑罰を決定すべきである．

上掲例の P は，「怒り」を含め王の心が落ち着き，王が冷静な判断が出来るようになることを意味していると考えられる[5]．

## 3. 「喜ぶ」「満足する」との併用

… tato-tato labhat' eva attamanataṃ labhati cetaso **pasādaṃ**.（A III, p. 237）
……それぞれ〔の教えの類〕からも人は思考が喜ぶことを得，**心の pasāda**（**清らかさ・喜び**）を得ることだろう」
svāhaṃ muditamano **pasannacitto**
añjaliṃ akariṃ Tathāgatassa …（Vv p. 124［83.15ab］）
〔如来を見た〕その私は，思考が〔奪われんばかりに〕喜び，**pra-√sad している**（**清らかな・喜びの**）**心をもつ者**として
如来にアンジャリを作った……
devatā devakaññā ca **pasannā** tuṭṭhamānasā
pañcavaṇṇikapupphehi pūjayanti narāsabhaṃ.（Bv p. 3［1.25］）
〔仏を見た〕神格と神の娘は **pra-√sad し**（**〔心が〕清まっており・満足し**），思考が満足して，
五色の花々により人間の中の雄牛（仏）を供養していた．

上掲の「喜ぶ」「満足する」といった語と併用される P は，内面の清らかさが併用語に近しい意味で使用されていると解される[6]．P がこういった人や事物に向けられる心情を示し得るかどうかについては，次の P と paduṭṭha との対比例を通して考えてみたい．

## 4. paduṭṭha との対比

パーリ聖典内には，P と paduṭṭha（pp.）が対比的に使用される例が数例確認される[7]．paduṭṭha は語形上サンスクリット語 pra-√duṣ（ダメになる・悪化する）に由来し，pra-√dviṣ（憎む）の意味ももつ[8]．以下，そのうちの3例の要点を示す．

①心が汚れている者（paduṭṭhacitta）はそれ（padosa）を因として悪趣に落ちる．〔**汚れが**〕**落ち着き心が清らかな者**（**pasannacitta**）**は**それ（pasāda）を因として善趣に生じる（A I, pp. 8–9）[9]．
②汚れた/（敵意ある）思考により（manasā … paduṭṭena）語り行動すれば，苦がその者に付き従う．**清らかな/**（**好意ある**）**思考により**（**manasā … pasannena**）語り行動すれば，苦がその者について行く（Dhp 1–2）．
③内側で（〔**憎しみが**〕**落ち着き心が清まっている者⇒**）**好意を懐く者**（**pasannacitta**）となる者は海の向こうにあっても同じである一方，内側で敵意を懐く者（paduṭṭha-citta）となる者は海の向こうにあっても同じである（Ja IV, p. 217［476.35］）．

①の paduṭṭha の意味は直後に比喩として水の汚れやその浄化が言及されている点から確定される（⇒1）．②の paduṭṭha 理解は註釈によるが（Dhp-a I p. 23），聖典レベルでは√duṣ, √dviṣ どちらの方向性の可能性も残す．③は前後に diso（敵），disā（敵達）という√dviṣ 由来の語が使用される点から，paduṭṭhacitta も同じ方向性で理解される[10]．本例の P の意味に関しては次の例も参考になるであろう．

> pañc' ime bhikkhave ādīnavā **puggalappasāde**. katame pañca? yasmiṃ bhikkhave puggale puggalo **abhippasanno** hoti, so tathārūpaṃ āpattiṃ āpanno hoti, yathārūpāya āpattiyā saṅgho ukkhipati. tassa evaṃ hoti: yo kho myāyaṃ puggalo piyo manāpo, so saṅghena ukkhitto ti, bhikkhūsu **appasādabahulo** hoti, …（A III, p. 270）
> 比丘等よ，**人に対する pasāda に関する**これら5つの災いがある．5つとはどれか？比丘等よ，人が人に対し **abhi-pra-√sad している**（**好意を懐く**）**者**となり，その者（abhi-pra-√sad を向けられた者）はその過失により僧団が活動停止にするような，そういう過失（挙罪羯磨）を犯した者となる．その者（abhi-pra-√sad した者）は次の様に思う．「知っての通り，①私にとって好ましく，意に叶うこの人が僧団により活動停止にされている」と．②〔彼は〕比丘達に対し appasāda（不満・不信感・敵意）いっぱいの者となる．……

上掲例では abhi-pra-√sad を向ける者（=「好ましく，意に叶う者」（piya, manāpa））が僧団内で罰則を受けることで（下線部①），人が比丘達に対し appasāda を抱いている（下線部②）．

上に取り上げた諸例を参照すると，paduṭṭha が「汚れた」と「憎しみ」の両義に解釈できることに対応する形で，P が「清らかな」とともに「好意を懐く」程の意味で使用されている．心的な P は，心が落ち着き清らかになることだけではなく，文脈に応じて，人や事物に向けられる肯定的な心情をも示し得る．

## 5. 「信」としての pra-√sad

4で取り上げたPの特徴を踏まえれば，「疑い」と対比される pra-√sad に「信」の意味を指摘できると考える．

yo so Sāriputta ariyasāvako Tathāgate ekantagato **abhippasanno**, na so Tathāgate vā Tathāgatasāsane vā kaṅkheyya vā vicikiccheyya vā ti?（S V, p. 225）
（釈尊）「サーリプッタよ，如来に対し一途となり，**abhi-pra-√sad している**（〔**疑いが**〕**落ち着き**〔**心が**〕**清まっている⇒**）**固く信じている**）立派な弟子が，如来，あるいは如来の教えについて疑い，あるいは思い迷うことはあり得ないのではないか？」と．

上掲例ではPに abhi-が付されているが，直後に「信」の対義語にあたる「疑い」にあたる語が使用される（下線部）[11]．本例の abhi-pra-√sad する者は五根を自ら修習することを通して abhi-śrad-√dhā している（固く信じている）者のことを指す（S V, p. 226）．paduṭṭha との対比例で指摘した点をふまえれば，このPもまた，単に心が清らかになることにとどまらず，仏を「信じること」を意味していると言えるであろう[12]．

尚，4, 5に「⇒」を用いて示した「憎しみ」「疑い」といった心の汚れが「落ち着き清らかになる」⇒「好意を懐く」「信じる」という展開の想定はあくまで仮説の域を出るものではないが，Ś に依存しない「信」としてのPを考えるにあたっての視点の一つとして，ここに提示しておく．

## おわりに

以上，パーリ聖典中に使用される内面的なPが心の「落ち着き」や「浄化」を基本としながらも，「好意」「信」等の具体的な人や事物に対する心情としても機能することを確認した．paduṭṭha との対比例に代表されるように，Pが示すことの出来る意味の領域は広い．Pを取り扱うにあたっては，文脈に応じて最も妥当な意味を取り出していく姿勢とともに，本語の一つの意味に限定されない多義的な性格に注意していく必要がある．

---

1）本語の語義と語形については後藤［2007］，阪本［2008］を参照頂きたい．
2）各辞書類を参照すると，Pは凡そ「落ち着き」「澄浄」を基本としながらも，「喜び」「満足」「輝き」「恩寵」といった様々な意味が設定される．仏教関連の辞書類ではこれらの意味に「信」が加わる．

3）藤田宏達氏は，Vism 等を引用しつつ Ś（信）という心の働きによって起こる心の浄化が P により示されていると解すとともに，併用例をもとに P を Ś の同義語と解す（藤田［1957: 82–85］［1992: 106–110］）．Gethin［1992: 112］は P の意味を示す困難さを指摘する．
4）その他：D I, p. 76, 84, II, p. 129, S V, p. 125, Th 1008, Ap p. 240［285.1］，etc.
5）その他：S I, p. 179, A IV, p. 26, Pv p. 67［36.19］，Ja III, p. 307［392.116］，p. 443［420.33］，IV, p. 274［483.151］，etc.
6）その他：Ap p. 55［11.2］，56［12.6］，Ja IV, p. 202［543.873］，etc.
7）*Pali English Dictionary*（1998 年版）s.v. paduṭṭha は pasanna との対比例を一部指摘する．その他 Cf. A III, pp. 371f., IV, pp. 136f., It pp. 12–14, Pv p. 66［36.14］.
8）本語については稲葉維摩氏の論考を参照頂きたい（Inaba［2016］）．稲葉氏には paduṭṭha の意味に関して貴重な助言を頂いた．ここに感謝申し上げる．
9）パーリ聖典における信仰に関わる語と生天に関しては勝本［1999］が考察を加えている．
10）… yo pubbe sumano hutvā pacchā sampajjate diso … saṃvasanto vivasanti ye disā te rathesabha, …（Ja IV, p. 217［476.33 cd, 36ab］）「……以前に喜ぶ者となっても，後には敵となってしまう……敵同士である者達は共住しても，離れて住むことになる．車〔を牽く〕牛よ……」.
11）預流者は三宝に関する kaṅkhā が存在しないと説かれる一方で（D II, p. 155, A II, p. 80），三宝に関する aveccappasāda を具えた者ともされる（S V, p. 372）.
12）その他 Cf. D I, 106, III, p. 217, 238, S II, p. 84, A III, pp. 248f., Ud-a p. 283, etc.

パーリ語テキストは Pali Text Society（PTS）版（Ee）を底本とし，略号は *A Critical Pāli Dictionary*（CPD）の Epilegomena に従う．

〈参考文献〉

Gethin, Rupert. 1992. *The Buddhist Path to Awakening: A Study of Bodhi-Pakkhiyā Dhammā*. Leiden: E. J. Brill.
Yuima Inaba. 2016. “On the Verbs *duṣ*- and *dviṣ*- in Pāli.”『印仏研』64（3）: 1133–1139.
勝本華蓮 1999「原始仏教における信仰と天界往生」『仏教文化』9: 75–99.
後藤敏文 2007「*śraddhā́*-, *crēdō* の語義と語形について」『論集』35: 578–561.
阪本（後藤）純子 2008「「水たち」*ápas* と「信」*śraddhā́*- ――古代インド宗教における世界観――」『論集』35: 110–89.
藤田宏達 1957「原始仏教における信の形態」『北海道大学文学部紀要』6: 65–110.
藤田宏達 1992「原始仏教における信」『仏教思想 11　信』平楽寺書店，91–142.

〈キーワード〉 pasāda，prasāda，saddhā，śraddhā，浄信，信

（（公財）東洋哲学研究所研究員，博士（文学））